

「豊洲ユニバーサルデザイン探検隊 -みんなにやさしい豊洲の街を目指して-」プロジェクト

代表者 中村広幸【教授】（工学部 共通学群）

構成員 任龍在（工学部 非常勤講師・群馬大学 教育学部 准教授）／
河野純大（工学部 非常勤講師・筑波技術大学 准教授）／吉本浩二（工学部 非常勤講師・富士通）／
岡本明（工学部 特別招聘講師）

プロジェクトの概要

豊洲は、様々な人々の暮らしや働く場であるとともに、多くの人々が訪れる街。また、豊洲には、子供、子育て世代、中・高年、障害のある人、外国からの人など、多様な人々が住み、働いている。2020東京オリンピック・パラリンピック時には多くの障害者が豊洲を訪れるだろう。

しかし、「多様な人々が生活したり訪れる街」という観点で見た時、豊洲には意外なところに多くの落とし穴がある。

本プロジェクトは、学生と地域住民が共に、バリアフリーやユニバーサルデザインの観点から豊洲の街の良い点や改善点を見だし、体験し、理解し、次代の豊洲の街づくりに役立てる試みである。

COC活動の成果

【教育】

本プロジェクトの中心となるのは工学部で開かれている人文社会科目の授業「福祉と技術」である。

同授業は「全盲」や「上肢障害」を持つ障害当事者（吉本・任）、障害者教育の専門家（河野）、支援技術開発の専門家（岡本）を講師陣に加え、車椅子による疑似体験や全盲の疑似体験を行ったり、講師以外の複数の障害当事者を招いて、学生との間で広くディスカッションを行っている。

疑似体験は単なる体験ではなく、問題発見のための事前課題、問題の確認と自身の（工学）専門分野との関連性を理解するために事後のディスカッションを行い、学生が主体的に参加・学習する構成としている。

こうしたPBL型の授業展開や地域で行うフィールドワークといったアクティブラーニングが授業効果に及ぼす影響は大きく、学生の評価は高い。

【研究】

情報福祉分野（情報のユニバーサルデザイン、情報アクセシビリティ）をテーマとする卒業研究並びに修士論文研究において、高齢者・障害者のQOL向上のための情報環境整備に関する研究の一部と位置づけ、豊洲地区をフィールドとして研究を遂行した。研究成果の一部は、2017年6月に情報通信学会等で発表した。

【社会貢献】

本プロジェクトでは、豊洲地区の住民にも広く参加を呼びかけた。豊洲地区は若い世代が多く一般にこのテーマに関心が低いが、それでも関心を持つ子育て世代や高齢者の参加を得た。各年（2016年・2017年）の「探検隊」実施後、教室で参加者も交えたディスカッションを行ったり、当日以外の授業を地域に公開し複数の住民の参加を得、豊洲地区の問題として議論をすることができた。

本プロジェクトの成果をもとに、豊洲地区内の福祉環境や情報福祉環境に関する実状の把握と分析を行い、2020年オリンピック・パラリンピックに向けた、そして、その後の街づくりに対して提言していく。



障害当事者（肢体不自由・発話障害）を招いて広くディスカッションを行った



タッチパネルを利用した機器が増えているが、車椅子利用者や視覚障害のある人、手指に震えのある高齢者などが使えない（使い難い）



地域住民を交えて、豊洲の街を探検後、体験をもとに幅広くディスカッションを行った

主なトピックス

2016年度探検隊

2016年11月19日に実施。学生のほか、豊洲地区に在住・在勤の地域の方を交え、約30人の参加者。

車椅子で普段生活している人(小野塚航)を隊長に、隊員は車椅子に交替で乗ったり、ベビーカーを利用したりしながら豊洲の街を回る。探検後は、それぞれに見つけたこと、考えたこと、今後どう活かしていくかなどを話し合った。



2016年度の探検隊。グループごとに交替で車椅子を利用し豊洲を探検

2017年度探検隊

2017年11月23日に実施。学生のほか、豊洲地区に在住・在勤の地域の方を交え、約25人の参加者。

参加者は2人一組となり、全盲役はアイマスクを付けて白杖を持ち、ガイド役とともに、豊洲の街を歩いたり豊洲駅を歩いたりした。探検後は、それぞれに見つけたこと、考えたこと、今後どう活かしていくかなどを話し合った。



2017年度の探検隊。二人一組で全盲役・ガイド役を務め、豊洲を探検

広い歩行空間は功罪併せ持つ

豊洲の街は約10年前に開発され、今も開発が進む新しい街。公開空地が多く街区は広い歩行空間を生んでいる。多数の街路樹も多くの人にゆとりある街並みを与える。余裕をもって通行でき、車椅子やベビーカーの利用者が使いやすい。

一方で、視覚障害者には歩行の手がかりが少なく、一人で歩くことが困難。しかし、ガイド役となる点字ブロックが十分ではない。街路樹の枝が目の高さにあり、見える人には危険は少ないが視覚障害には大きなリスク。また、自転車と歩行者の分離が不明確。歩行者を縫うように走る自転車。自転車事故の発生は都内有数。高齢者や視覚障害のある人にとってはヒヤヒヤ。



豊洲は空間的にゆとりがある街区だが、あちこちに予期せぬ「障害」がある

他者を理解する

豊洲は比較的若い世代が多いが、子育て世代、中高年、障害のある人、外国人と、多様な人が住み、働く街。2020年オリンピック・パラリンピックの際には、海外から多くの、かつ、障害者を含む多様な人々が訪れる。

今は元気でも、年を重ねると誰でも身体機能が低下する。怪我をして、しばらく体の一部が動かないこともある。ベビーカーでも移動に制約が生じる。誰でもが「障害者」になる可能性がある。住む人、働く人、訪れる人、みんなにやさしい豊洲の街にしていくためには、一人ひとりが他者を理解することが重要。



街路樹、植え込み、ベンチ、点字ブロックのない歩道、豊洲の街は全盲の人にはハードルが高い